

2019 韓国スタディツアー 報告書



北九州ESD協議会
調査研究・国際プロジェクト

※表紙の写真は「第4トンネル（1990年3月発見）」

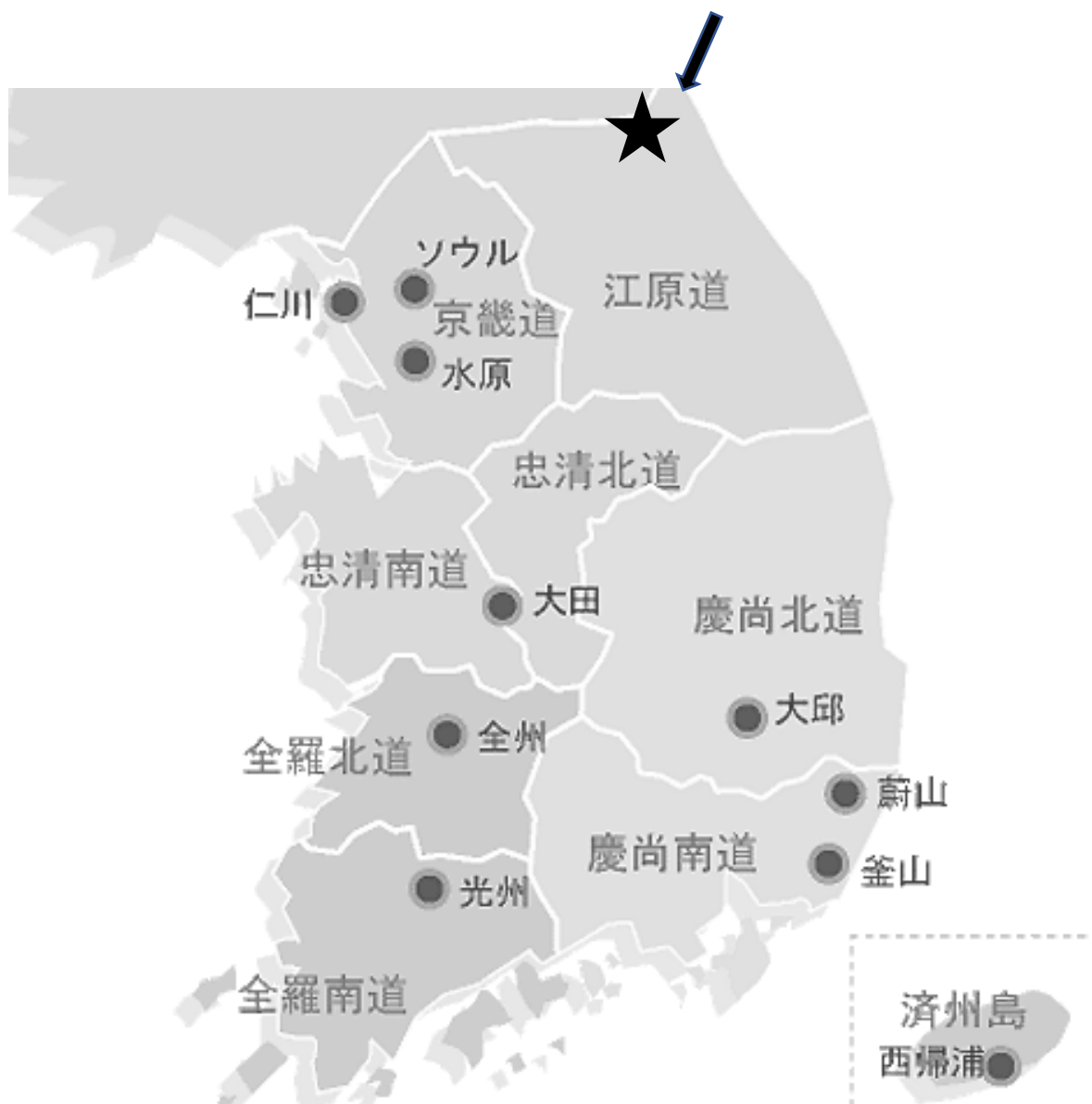
軍事境界線から1.2km離れた楊口の北東26キロの非武装地帯の内部から発見された。

高さと幅がそれぞれ1.7メートル、深さは地下145m、長さは2,052m。

目 次

1、	巻頭言	1
2、	韓国スタディツアー2019 概要	2
3、	若者が見た！感じた！「命と平和」	3
	○北九州市立大学 青木 菜緒	
	○北九州市立大学 上野 由太郎	
	○北九州市立大学 野村 七輝	
	○韓国海洋大学校 朴 賛佑	
	○北九州市立大学 増江 さら	
	○北九州市立大学 森 美佳子	
	○久留米大学 山川 悠来	
	○岡山大学 脇坂 涼奈	
	○岡山大学 吉岡 朱里	
4、	探訪を通しての学び	13
	○韓国 DMZ 平和と生命の丘・鄭範陳副理事長の講話	
	○五行循環体験	
	○RCE インジェ事例発表	
	○RCE 岡山・北九州事例発表	
	○DMZ 乙支（ウルチ）展望台・第4トンネル	
	○紅葉見学とピレ薬水	
	○百潭寺（ペクタムサ）	
	○山村体験（ネッカマウル）	
	○韓国伝統料理体験	
	○韓国伝統文化体験	
	○新南高校との交流	
	○一番近い外国・韓国食レポ	
5、	ESD×スタディツアー＝オトナとしての私	33
	○アニョハセヨ！ 韓国インジェのみなさん 三宅 博之	
	○インジェ・スタディツアー2019 を終えて 川島 伸治	
	○韓国スタディツアーに参加して 稲田 佳代子	
	○2019年 インジェスタディツアー 宋 珉鎬	
	○旅の間に考えた。～ESD と RCE と SDGs～ 後藤 加奈子	
	○インジェスタディツアーに参加して 高橋 誠一	
	○韓国スタディツアー2019 を終えて 川出 信之	

●麟蹄郡（インジェ郡）は大韓民国江原道北部にある郡。軍事境界線に接する。



●麟蹄郡（인제군）

- ・面積: 1,646.08 km²
- ・総人口: 32,720 人 (2016 年末)
- ・10 月平均気温: 11.2 度 (最高気温 18.7 度、最低気温 5.4 度)

1、巻頭言

調査研究・国際プロジェクトチームが中心となり、行っている海外への ESD ツアー。今年度も昨年度同様に、慣れ親しんでいるインジェ郡を選んだ。昨年との大きな違いは、次のようなことである。

まず、去年（2019年）の2月に国内 RCE 実務者会議が北九州で開かれたとき、RCE 北九州の一つの目玉企画でもある韓国との交流について、他の RCE メンバーから次回の韓国 ESD ツアーへの参加願いがあった。よって、今回は、他の RCE メンバーにも声をかけたわけである。国連大学の配慮で、ユースに限っては補助を行うことが明らかにされた。その結果として、国連大学や日本の他の RCE からの参加者が今回のツアーに参加することになった。そのために、国内 RCE のユースチームに所属する若者の交流・討論を兼ねることが主目的の一つにもなった。

次に、韓国内での移動手段を RCE インジェに頼らず、日本の旅行代理店を通じて手配したことであった。大学の授業でも集団でバスを借り切り、予定の訪問場所まで行くことがある。日本での貸し切りバスの値段の相場を知っていたので、韓国でもかなり高く、そのため、参加者が負担する費用が高くなるだろうと予想していた。しかし、北九州 ESD 協議会事務局から提示されたバスの貸し切りの値段を知って、正直私の予想額をはるかに下回っていたのには驚いた。よって、バスを借り切って訪問地を回ることに決定した。

集合も、日本各地の空港からそれぞれの便でインチョン国際空港に集まることになった。同空港は、最近、第一ターミナルと第二ターミナルに分かれ、双方のターミナルを行き来するのに、かなりの時間を要するという。コーディネーター兼通訳の宋さんに、バスの運転手とガイドさんに絶えず連絡を取ってもらい、全員が最終的に集合できるようにした。

今までは通訳を宋さんに頼っていたが、今回は、インジェ郡では日本女性にさせていただくことになった。コーディネーターは本当に忙しく、通訳まで手が回らないこともある。よって、他に通訳を置いたのである。今回は、北九州市立大学への1年間の留学経験があり、私のゼミに所属していた韓国海洋大学の4年生も通訳として加わった。どれぐらい通訳ができるか、個人的に楽しみにしていた。

訪問場所は、昨年とほぼ同じである。インジェ郡の住民たちとの交流を行った RCE インジェが入居する建物、韓国 DMZ 平和と生命の丘、軍事境界線に位置する韓国側展望台、第4トンネル、韓国料理体験場、ネッカマウルなどである。昨年、雪のために行くことができなかった百潭寺（ペクタムサ）が新たな訪問先に加わった。韓国の寺は人里離れた山中にあり、建物自体も大きいと聞く。

以上のような昨年との相違点を持ちながら、楽しく、成果の多い韓国 ESD ツアーを終えて帰国した。病気になることもなく、無事に帰国できたことを喜びたい。若者たちも、数々の思い出ができたと思う。本報告書の中にいっぱい詰まっている。

三宅 博之

2、韓国スタディツアー2019 概要

- 視察先：RCE インジェ
- 日 程：2019年10月25日（金）～28日（月）
- 参加者：16名（学生9名含む）
- 宿泊地：韓国 DMZ 平和と生命の丘（麟蹄郡瑞和面瑞和里）

1 日目:10月25日(金)

- 午後:仁川空港集合
- 韓国 DMZ 平和と生命の丘到着
- RCE インジェとの懇談会
- 五行循環体験

2 日目:10月26日(土)

- 午前:RCE 交流会@RCE インジェ事務所ビル
- 日韓 RCE 活動事例発表
(北九州・岡山・インジェ)

3 日目:10月27日(日)

- 午前:ユネスコソラク山国立公園観光
- 紅葉見学・ピレ薬水
- 百潭寺(ペクタムサ)

- 午後:韓国 DMZ 探訪
- 乙支(ウルチ)展望台
- 第4トンネル

午後:RCE インジェ現地視察

- 山村体験
- 韓国伝統料理体験
- RCE 役員、地元住民との食事会
- 韓国伝統文化体験(韓国伝統太鼓)

4 日目:10月28日(月)

- 午前:新南高校訪問
- 新南高校取組み発表
- RCE 北九州活動事例発表
- 午後:インジェ→仁川空港→帰国

ユース参加者		社会人参加者	
岡山大学 (RCE 岡山)	脇坂 涼奈	国連大学サステイナビリティ高等研究所/ プロジェクトアドバイザー	川出 信之
岡山大学 (RCE 岡山)	吉岡 朱里	調査研究・国際プロジェクトリーダー/ 北九州市立大学教授	三宅 博之
久留米大学 (RCE 北九州)	山川 悠来	調査研究・国際プロジェクトメンバー	川島 伸治
韓国海洋大学校 (RCE 北九州)	朴 賛佑	調査研究・国際プロジェクトメンバー	後藤 加奈子
北九州市立大学 (RCE 北九州)	上野 由太郎	北九州市環境局環境学習課	稲田 佳代子
北九州市立大学 (RCE 北九州)	野村 七輝	コーディネーター ((株) グローバルアリーナ)	宋 珉鎬
北九州市立大学 (RCE 北九州)	青木 菜緒	北九州 ESD 協議会事務局長	高橋 誠一
北九州市立大学 (RCE 北九州)	森 美佳子		
北九州市立大学 (RCE 北九州)	増江 さら		

3、若者が見た！感じた！「命と平和」

○北九州市立大学	青木 菜緒	-----	4
○北九州市立大学	上野 由太郎	-----	5
○北九州市立大学	野村 七輝	-----	6
○韓国海洋大学校	朴 贊佑	-----	7
○北九州市立大学	増江 さら	-----	8
○北九州市立大学	森 美佳子	-----	9
○久留米大学	山川 悠来	-----	9
○岡山大学	脇坂 涼奈	-----	10
○岡山大学	吉岡 朱里	-----	12



研修の感想

北九州市立大学 青木 菜緒

今回の研修で最も印象に残っているのは、やはり乙支展望台での北朝鮮の見学と第4トンネルの見学である。この二箇所では、戦争は現在も続いているのだと感じさせられた。私にとって戦争とは過去のもので、テレビの向こうのことだと、どこか遠いものとして捉えてしまっていた。乙支展望台では初めて生で軍人という職業の人と会い、DMZという誰も足を踏み入れられない土地を目にした。そこで人間によって土地と人間が引き裂かれている事実を目の当たりにした。日本は島国であるためか、私は今まで国境というものを意識する機会が少なかった。このように、人間が決めた線によって立ち入りを制限されたりすることは、改めておかしいことだと強く感じた。また、1990年代に北朝鮮側から韓国に侵攻するために掘られた第4トンネルを見た際には、朝鮮戦争は終わっていないのだ、終戦と休戦は全く違うものだという事を再認識させられた。



(第4トンネル)



(美しい紅葉)

また、紅葉の最盛期に韓国に行けたことも素敵な経験になった。あんなにも山全体が赤くなる紅葉を目にするのは初めての経験であった。少し緯度が上がるだけでこんなにも木々は綺麗に色づくのかと感動するばかりであった。

4日間の研修で、多くの韓国人の方と触れ合う機会があったが、皆とても親切で優しく、私は韓国という国を好きになる一方であった。確かに日韓関係の悪化を感じる垂れ幕を目にする場面もあった。しかし、それ以上に同じ人間同士、触れ合えば言葉が違っても仲良くしたり、協力し合えるのだと研修を通して分かった。これからは様々な情報に流されずに、自分で体感したことを大切にして生活していきたい。少しずつそう考える人々が増えれば、草の根レベルでも国々の関係だけでなく、人間関係も無駄な争いが減ってくるのではないだろうか。初めての経験ばかりだったこの研修に参加できたことに強く感謝したい。

麟蹄郡研修で学んだこと

北九州市立大学 上野 由太郎

麟蹄郡研修で学んだのは、日韓関係が最悪と言われる今日でも日本人を温かく受け入れてくれる人々が沢山いたということです。現地に行ったことやその国の人と交流したことがないにも関わらず、ニュースなどから得られた情報から国ごと批判するのではなく、自分の目でしっかりと確認してから判断するべきであると感じました。

朝早くからこの間のお返しにと沢山の料理を振舞ってくれた婦人会の人たち、帰り際に笑顔で手を振ってくれた高校生たち、日本人が来るからと沢山の料理を用意してくれた飲食店の人たち、帰り際に貰った袋一杯のお土産、現地でしかわからない韓国人の優しさに触れることが出来ました。今回の研修は本当に良い体験をしたと思います。

今後は自分が日本を訪れた韓国人にこれ以上のもてなしを出来るようになりたいです。



(新南高校生との別れ)

韓国インジェ郡 ESD スタディツアー 感想

北九州市立大学 野村 七輝

私がスタディツアーに参加しようと思った動機は、観光地と呼ばれるソウルや釜山とは違った韓国の一面を見てみたいと思ったからである。韓国へは以前三宅ゼミ内の韓国プロジェクトで一度訪れたが、観光地を中心に回ったため韓国について深く知ることはできなかった。そこで今回、北九州 ESD 協議会の調査研究・国際プロジェクトに参加されている三宅先生から、個人の旅行で行くには難しいインジェ郡へのスタディツアーがあるというお話を頂き参加するに至った。

3泊4日のツアーの中で印象的だった事柄は大きく分けて3つある。1つ目は食についてである。インジェ滞在中に食べた食事はどれもとても美味しい物ばかりであった。朝食に登場した鯖の塩焼きは日本の物より 1.5 倍ほど大きく、それでいて身はとてもふわふわとしており絶品であった。基本的にどの料理にもキムチは必ずついてくる。しかもおかわり無料である。私たちがキムチを食べていると、まだ食べるかと嬉しそうに現地の方は聞いてくるのである。そこには、客人には食べきれないほどの料理でもてなさない失礼にあたるという、韓国人の考え方があるようだ。

2つ目は自然についてである。インジェには開発が進む都市部にはない雄大な自然がたくさん残っている。百潭寺で見た紅葉や透き通った川はとてもきれいであった。また、ネッカマウルでは、蓮の花が浮かぶ池や植物で作られた迷路など自然を思う存分満喫することが出来た。恐らく、韓国と聞いて自然を思い浮かべる人は少ないだろう。大半はグルメや化粧品、アイドルなどではないか。しかし、インジェでは大自然を肌で体感し、心が浄化されたように感じた。より韓国のローカルな部分を見ることが出来てとても有意義な時間であった。

3つ目は人についてである。スタディツアーを通してたくさんの人の多様な意見を聞くことが出来た。2日目の持続可能な発展についての交流会での、韓国の高校生の環境への取り組みの発表では、高校生の行動力を実感したとともに自分も何かアクションを起こさなければならぬと思われ、とても刺激になった。また、同じく参加者の岡山大学の学生とは、お互いの価値観や悩みについて話すことが出来た。他大学の学生と交流する機会はなかなかないので、興味深い話ばかりであった。同じ日本の大学生といえども、お互いに考え方が違う所もあれば同じ所もある。多様性の素晴らしさを実感する事が出来た。

スタディツアーを通して、住む場所や性別、職業が違えども ESD を共通のテーマとして意見を交換し、より知識を深めることが出来た。インジェで得た知識や経験を大学生活および課外活動にどう落とし込むかが今後の課題だと思う。最後に、親切にしてくださった現地の方々に感謝を申し上げたい。

感想文

韓国海洋大学校 朴 贊 佑^{パク チョンウ}

今回のインジェ行き、及びソウルのESDのスタディツアーを通し、私は普段から興味を持っていたSDGsに関して様々なことが勉強できたと思います。インジェで、日本の学生の発表と、韓国の関係者の方々及び学生が互いに発表しあい、それぞれ持っていた知識及び計画などを交換し合うことは、最近話題になっている日韓関係にかかわらず、同じ目標を目指し進むということで、あまりにも素晴らしいことであると思いました。

インジェで、韓国DMZ 平和と生命の丘で受けた授業は、とても意味深いものであったと思います。我が国の最先端で、北朝鮮と向き合っているというところであるにもかかわらず、平和に関して研究できるということ、北朝鮮が地下洞窟を掘ったところが観光地として成り立っていること、様々なことが、私にとっては不思議に思われました。特に、私はインジェで兵役の義務を果たしたが故、多分そこにいた他の方々とはまた違う感想を持ったと思います。

次に、ソウルのドボン区で行われたESDの発表に対しても、物凄く勉強になったと思います。韓国の事例、及び外国からの事例、UN から直接来ていただいた方々の発表、三宅先生から直接の発表。それをみて、SDGs に関してどんなことができるのかが少しずつ見えてきたと思います。

発表で見た映像で、グレタトゥーンベリーの話していたことが、今になっても記憶に残っています。“How dare you?” だと。我々大人に対して、憤怒を投げかけた少女の叫び声が、とても忘れられない、心に直接届くものであったと思います。我々が住むこの世界を、いずれは未来を住む子どもらにあげるべき世界を、力を持っているという理由だけで、自分勝手にすることは、犯罪に等しきことであると。平和であり、豊かであり、緑に満ちた世界を保存すべきである、力を持った現世代が、その義務を見捨て、戦争し合い、開発という理由の下で環境を破壊し、貧富の格差など気にせず、発展しようとする途上国など無視することは、人類に対する犯罪であると、私にはそう叫んでいるようにみえました。

20代である我々には、まだ先のことであると見えがちですが、まもなく数年後には、我々が、世界を動かす主役になると、私はそう思います。故に、後のことにせず、今から勉強してゆくべきであると、私にはそう伝わってきました。

初めての韓国訪問での学び

北九州市立大学 増江 さら

私は今回の ESD スタディツアーで初めて韓国を訪れました。参加するまで、インジェという街の名前はもちろん、どこに位置するのかや RCE インジェの取り組みについても全く知らず、無知の状態で出発しました。私の個人的な旅の目的は、「日本と親しみの多い韓国で、様々な体験を通して何か学びを見つける」ことで、初の韓国に強い好奇心を持っていました。

飛行機を降り、バスで約 3 時間程度の場所にあるインジェは、田や山に囲まれた自然豊かな場所だと感じたのが第一印象です。このツアーでは、インジェの環境についての問題や直面している政治問題などについてのお話を聞く機会や、未だに軍事体制の厳しい現地を訪れる体験などをしましたが、私が一番心に残っていることは 3 日目の月鶴里での山村マウル体験です。月鶴里では地域住民が参加したまちづくりが行なわれており、その土地を生かした農作物を育てたり、子どもも楽しめる遊び場を作ったりと大自然の中での散策を楽しむことが出来たのと同時に、住民たちがともに支え合いながら自分たちが住んでいる場所に誇りを持って、持続可能な村にしていくために大切に守り続けているということに気づくことができました。日本と韓国は位置的にも近く、どこか似ている部分があったり、歴史上でも交流の多い国であったりと親しい関係にあります。その分お互いの国が抱える問題についてももっと知り合う必要があるように思います。

今回のツアーで RCE インジェの取り組みについてのプレゼンがありましたが、日本以外の国がどのような ESD 活動に励んでいるのかを知り、隣国が直面している問題を他人事として捉えるのではなく自分の問題として捉えなければならないと気付かされました。それが成されてこそ、平和と生命の共存を作っていくのだと思います。そのためにも、現地に赴き自分の目で見て心で何かを感じとることが大切であることを、このスタディツアーで心底感じました。韓国語を話せない私に優しく親切に接して下さったインジェの方々やそこでしか出来ない貴重な体験を振り返ると、初めて訪れた場所がインジェで本当に良かったです。この旅で学んだことを留めておくだけでなく、周囲の人たちに話してインジェの魅力を伝えることや私たちが持続可能な社会にするためにできることを改めて考え直すことでスタディツアーに参加出来たことがより意義のあるものになると思うので、これからの学生生活で生かしていきます。また、次に韓国を訪れる際は自分の言葉で現地の方達と会話ができるように、韓国語の勉強にももっと力を入れて頑張りたいと思います。

4 日間大変お世話になりました。

インジェでの経験を通して

北九州市立大学 森 美佳子

今回、生まれて初めての海外旅行で韓国のインジェを訪れたが、とても多くのことを学ぶことができたし、本当にいい経験ができたと思っている。このスタディツアーで出会えた参加者の皆さんや韓国の方々に本当に感謝している。

韓国旅行といえばソウルやプサンをイメージする人が多いと思うが、今回はインジェを訪れ、環境や歴史、文化などのそこにしかない貴重なものに沢山触れることができた。

韓国 DMZ 平和と生命の丘を訪問し、実際に展望台で境界線を見たりお話を聞いたりすることで、実際に聞くまでは知らなかった事実や、現地の方々の平和に対する思いや取り組みを知ることができた。同時に、自分も平和に対して関心を持つべきだと思った。

わたしが今回のスタディツアーでとても強く感じたものは異文化交流の楽しさだった。言葉や文化の違う方々と交流し、互いにいろいろなものを交換し合うことで、自分の考え方や価値観を広げられたと思う。日韓関係の冷え込みが問題になっているが、実際に行って交流してみるとあたたかい方ばかりで、韓国に対する自分の考え方が変わったし、今まで以上に韓国に関心を持つようになった。違う文化を持つ人々との交流の楽しさや有意義さを、より多くの人に広められるように、今後もいろいろな方面に関心や興味を持ち続けていこうと思う。

感 想

久留米大学 山川 悠来

韓国を訪れるのは5度目、インジェを訪れるのは3度目でした。日韓関係は改善されることのないにもかかわらず出会う方々はいつも誰でも温かく接してくれます。

今回のプログラムでは現地の方々のESDの活動のお話を聞くこともでき大変有意義な時間を過ごすことができたと思います。

感 謝

岡山大学 脇坂 涼奈

私は今回のツアーで初めて韓国を訪れた。岡山からわずか1時間半で着くとは知らず、行ってみると、こんなにも距離の近い場所だったのかと驚いた。現地の人々や見た景色、食べた料理、知った文化など、全てが私にとって初めてであり、そのどれもが魅力的・刺激的であった。それらを詳しく書こうと思うと1ページにはとても収まらない。それほどに学び多き旅であったのだと思う。以下、書いておきたいことを絞って述べる。

ちょうどツアーに参加する前、日本では日韓関係の悪化がニュースでよく言われていた。その影響か、私は親に韓国に行くことを「怖い」とか「危ない」と心配され、知り合いには「韓国には行くな」とまで言われている人もいた。関連のネットニュースを見れば、コメント欄には関係の悪化を煽るような意見さえ見られた。そのように周囲から入ってくる情報には、偏ったものも多かったと思う。私が実際に行った韓国は、怖くも危なくもなく、むしろ出会った人々は本当に優しくて温かった。RCE インジェの方々は韓国語がわからない私にも沢山話しかけてくださり、名前まで覚えて読んでくださった。乙支展望台では軍人さんが日本語で話しかけてくださり、帰る際には笑顔で手を振ってくださった。新南高校では、日本のアニメや風景が好きと言ってくれた女の子もいた。そんな風に日本人の私たちを迎えてくださる方々がいたことに、とても感動した。同時に、国内で言われている情報だけに流されないことの大切さを学んだように思う。たとえばニュースを見たり、歴史を調べたりしているうちに、それまで自分が直接のつながりを感じることもなかった韓国が、日本とは難しい関係にあることは認識していた。そしてその現実の複雑さは、自分の手の届く範囲内にある情報だけでは解釈しきれないと感じた。しかし、実際に現地に行き、自分の目で見て聞いて現実を確かめれば、色々な人がいて、多様な考えがあることに気付いた。そして、隣国と共有する歴史や、その中で育まれてきた特有の文化や景色を、実際に肌で感じる事が出来た。私が生きている狭い日常の中には様々な情報が溢れ、時には流され、混乱したりすることがある。だが、その裏側にはまだ知らない数多くの現実や、人々の姿がある。このような事実気付けたことは、今回のツアーのテーマであった「平和」を考えるヒントになったように思う。私は、韓国 DMZ 平和と生命の丘副理事長が仰っていた「相手を恨む人の方が苦しい」気持ちが、韓国の方々の中にあることを理解したい。そして、歴史が今につながっていることを忘れず、様々な視点からこれからの持続可能な社会、平和について考えていきたいと思った。そしてこの経験を、行ったことがないのに「韓国は怖い」と思っていた身近な人たちにも伝えていきたい。「平和」は自分一人では解決することの出来ない問題であり、だからこそ、国内外の多くの人と話し、経験を共有し、共に考えていくことが大切だと思う。今回の旅で感じた想いや、優しい人々との出会い、見たもの・気付けたこと全ては、参加し

なければ得ることのなかったものだ。今あるつながり、現地に行こうと思えば行くことが出来る幸せ、交流の大切さを感じられた。そして、共通の課題を乗り越えるための鍵である ESD について学べたことも意義深い。皆さんの取組を知って、まだまだ自分にもやれることがあり、未来に希望を残したいと思った。今後も、新たな学びに積極的に挑戦していきたい。温かい思い出とともに、ツアーに携わったすべての人に感謝したい。

来年も、全国の RCE から募集をされるのだろうか。場所や活動内容が変わる可能性もあるが、次の参加者の参考になればと、いくつか書き記しておく。まず、麟蹄の 10 月末の気温は、昼間はそこまで寒くはないと感じたが、朝晩は冷え込んだ。「麟蹄郡 気温」で調べると最高・最低気温が出てくるので参考にすると良いと思う。自分は冷え性で寒いのが苦手だが、建物やバスの中にいる時間が多く寒さを感じる時間が少なかったというのもあり、ヒートテックに厚めのニットとアウターで何とか耐えた。今回宿泊した韓国 DMZ 平和と生命の丘の施設には床暖房もあったので十分温かく、寒くて寝られないということにはなかった。女性は今回一部屋に二人ずつで、各個室には風呂とトイレがあり、タオルや布団も用意されていた。トイレには紙を流さないように注意する必要がある。ヘアドライヤーや充電器などを使用するには、コンセントの変換アダプタについて行く前に調べておく必要がある。宿泊所の廊下には水や白湯を飲める機械もあり、ペットボトルのお水も日数分以上用意していただいたので飲み物には困らなかった。また、バスでの移動時間が長く、自分は終始バス酔いしてしまったので、強い人でも念のため酔い止め薬を持っていくと良いと思う。

現地で、ハングルで書かれた文字が分からない時は、私は「韓国語手書き辞書」という無料のアプリを使った。読めない文字があっても、それを見た通りにスマホの画面上に指で書くと、それに対応するハングル文字が出てきて、日本語での意味も表示してくれるという便利なアプリだ。出てきた文字をコピーして Google 翻訳にかけることで、現地で分からなかったお店の名前や情報を知ることが出来た。その他には、活動中、全体の様子が分かるような写真を沢山撮っておくと後で報告書を作る際に便利だと思う。また、事前にツアーで訪れる場所について調べ、情報を集めておくと、行ったときに日本語で調べても出てこないような疑問も解決させやすい。疑問すら沸かないレベルに情報が少ない状態で行くと、現地をただ見て終わりになる可能性もあるので、より学びを深めるためにも、是非興味を持って調べてみてほしい。韓国 DMZ 平和と生命の丘についてなどは過去のツアー報告書とともにパンフレットを請求しても良いのではないかと思う。ただ、自分はそう感じたけど、前提知識がない方が先入観がなく勉強になるという方もいるかもしれないので、あくまで参考程度に、ということにしておこうと思う。

「平和」を自分事として捉えるということ

岡山大学 吉岡 朱里

「平和は大切だ」は頻繁に見かけるメッセージである。しかし、「平和」が具体的に意味するものを考えることは少ない。今回のDMZ探訪では、現地の方々との交流を通して平和を希求することの大切さと難しさを知ることができた。

乙支展望台までの山道をバスが勢いよく登っていくと、麓の雄大な風景が目に飛び込んでくる。しかし、バスのすぐ横に視線を下げれば、そこには”MINE”という警告があるロープが張り巡らされていた。美しい自然と地雷、二つの間に存在する大きなギャップが心に刺さる。人の出入りが制限されているから自然が保全されているとは皮肉な話である。

乙支展望台にて北朝鮮の方を眺めたあと、山の上で冷え込んでいたので直ぐにバスに戻ろうと歩いていたところ、ある憲兵が「こんにちは」と日本語で話しかけてきた。聞いてみると、私と同じ21歳だそうだ。私は大学で勉強したり、友人と遊んだりして普段は戦争について考えることはない。



(韓国 DMZ 平和と生命の丘からの風景)

一方で、同じ年齢の彼は軍事境界線の目の前で警備にあたって、「終わっていない戦争」に直面している。気さくに話しかけてくれたが、生まれた国や性別が違うだけで直面する現実が全く異なることがショックだった。私にとって、乙支展望台からの景色は日常とかけ離れた非現実的な世界だが、この光景は彼らにとっての日常であることを強く実感した。

「平和」という言葉には様々な見方が存在するだろう。乙支展望台にいた憲兵と、日本で戦争を経験することなく育った私では、思い描く「平和」の姿は異なるかもしれない。インジェを訪れる以前は、「平和」については漫然としか考えることができなかった。だからこそ、対話を重ねてお互いの考え方を理解していくことの必要性を今回のスタディツアーで実感した。今後も継続して、韓国や日韓関係について関心を持っていきたい。

4、探訪を通しての学び

○韓国 DMZ 平和と生命の丘・鄭範陳副理事長の講話	14
○五行循環体験	15
○RCE インジェ事例発表	16
○RCE 岡山・北九州事例発表	18
○DMZ 乙支（ウルチ）展望台・第4トンネル	20
○紅葉見学とピレ薬水	22
○百潭寺（ペクタムサ）	23
○山村体験（ネッカマウル）	24
○韓国伝統料理体験	25
○韓国伝統文化体験	26
○新南高校との交流	27
○一番近い外国・韓国食レポ	29



平和と生命の東アジア共同の家建設のために
—韓国 DMZ 平和と生命の丘副理事長・鄭範陳氏から—

久留米大学 山川 悠来

現在地球上には“生命の危機”“文明の危機”“平和の危機”“成長の危機”という問題が存在する。2040年には地球の気候が限界に達し、資本と市場の成長という人間の欲のために地球温暖化と生命の生息地が破壊され、地球上の1/2が砂漠化するとも言われている。これらは私たち自身の問題であるにもかかわらず、世界の指導者たちは未来を生きる人たちに問題を任せっきりにしている。こういった“生命の危機”は“文明の危機”にもつながる。市場中心、資産中心の社会の結果、エネルギーは過度に使用されている。技術の発達が生態系に悪影響を及ぼしているため、経済の発展のみに焦点を置いた今の社会には反対である。

また、“平和の危機”とは米中の覇権争いや日韓の問題、朝鮮半島の南北統一問題や、香港での民主化デモがある。そして今後世界には成長不可能の時代が訪れると考えられる。

現在77億人の全世界の人口は、2100年には109億人に上るとされる。時代とともに人口が増加し、さらには人々の平均寿命も延びており、高齢化につながる。また、人口の増加は貧富の差の拡大にもつながる。こういった様々な問題を解決していくためには、一人ひとりが生活のサイクルを変えることが必要である。たとえ日常生活を少し不便にしても、節電をしたり、ごみを減らしたりと、小さな実践を通じて生き方を転換し、資本主義社会を見直していかなければならない。個人での実践は困難であるため、ともに実践していくことが必要であり、それこそがESDである。



(韓国 DMZ 平和と生命の丘)

五行循環体験

後藤 加奈子

五行循環の部屋は日本のサウナのようなものですが、温度差がある部屋が五つ用意されているのが特徴です。万物には「木」「火」「土」「金」「水」の五つの要素があり、それによって自然界の調和が保たれているという五行説に基づいて設計されています。人間の体も自然の一部であるとし、温熱によって治癒することを目的としています。入浴(?)するときは専用の部屋着に着替えます。一日のスケジュールを終えて五行循環の部屋に入ると身も心もゆっくりでき、会話も弾みました。本当は静かに瞑想すると効果も高まるのですが、修学旅行の子どもと同じ、非日常に興奮してはしゃいでしまいました。

さて、私たちがお世話になった「韓国 DMZ 平和と生命の丘」はその名の通り、生命をテーマの一つとしています。もちろん、人間のみならず多様な命を守る活動を行っています。

施設内には「生命を蘇らせる五行の丘」があり、約 300 種の樹木や薬草を育てているそうです。朝食にこの地で採れた野菜を使ったおかずがたくさん出され、施設全体に五行説が行き渡っているのが感じられました。五行循環の部屋は単なるサウナではなく、人間の生命を守り健康に導くための本施設の一部であるのです。だからやっぱり、おしゃべりしないで真剣に瞑想するべきだったとちょっとだけ反省しています。



(お揃いの部屋着で寛ぐメンバー。頭に乘せたタオルは羊巻き。)

1. RCE インジェについて

RCE インジェは、インジェの雄大な自然を保存していくために持続可能な発展や資源の節約、リサイクルなどに取り組んでいる。また、具体的な目標として2025年までに再生エネルギーを100%にするという目標を掲げている。RCE インジェは4つの軸に基づき活動を行っている。1つ目は包括的に教育を行うこと。2つ目は組織運動を起こすこと。3つ目は地球を守るために、小さなことでも実際に運動すること。4つ目は国際的に連帯して運動することである。

現在地球は急激な気候変動などにより危機状態に陥っている。実際に世界では気温が0.7度上昇していると言われているが、韓国では1.5度も上昇している。このように韓国を取巻く環境は非常に厳しい状態である。そのような中、インジェはユネスコから自然を保護していくように指定を受けている。インジェでは教育にも力を入れている。例えば、太陽光を使ったラーメン作りや、バナナの種を探しながら食べることで、バナナが自然からの恩恵だということを教えている。また、環境に関する絵本を読み聞かせ、実際に本に登場する植物の種を植えて、子ども達の手によって育て、収穫しその作物から種を得るというアクティブラーニングを実践している。



(RCE インジェ事務所にて)

2. インジェが抱える課題

インジェの人口は約 6 万人であるが、そのうちの約 3 万人が軍人であるという。インジェが抱える問題として医療施設の数が面積や人口に見合っていないということがあげられる。

診察を受けに行くために、2 時間から 3 時間かかることもあるといい、緊急を要する場合には非常に問題である。また、医師不足も深刻であり、400 人の患者を 1 人の医師で診察する必要があり、丁寧な診察ができないという。そこで、農業協同組合と RCE インジェが協働して医療実態調査団を立ち上げた。医療実態に関する聞き取り調査を 1 人につき 10 分から 1 時間程度行った。たった 3 人の調査員が 226 名の聞き取りを行ったため、調査完了までに 1 年を要した。

また高齢者の貧困や肥満問題がある。貧困と肥満は相互関係にある。なぜなら、経済的余裕があれば、ファストフードを食べることも健康的な食事をすることもできるが、経済的余裕がなければファストフードなどの安い食べ物を食べるほか選択肢がないのである。その結果肥満を引き起こしてしまう。

またインジェには産婦人科がないことも問題である。しかし、聞き取り調査でもしインジェに産婦人科ができたなら行くかと聞いたところ、信用できないから行かないという答えが返ってきたという。インジェ郡の市民は近隣の都市部の病院の方が信頼できると考えているのである。

また、外国人労働者については最低限の言語教育は行われているが、日常的な会話ができる程度に留まっており、インジェの住民と上手くコミュニケーションを取ることが出来ないため、孤立してしまうという問題があるという。そこで、パン屋の一角に相談窓口を開くなどして、外国人労働者の定着を図っている。

これらの様々な問題を解決するために RCE インジェは様々な提言を行っている。例えば、総合病院を作るのは難しいため既存の医療施設をより強化すべきというものや、西洋式の医師だけでなく、東洋医学を用いる保健所に韓方医を配置してはどうかというものである。

活動発表（日本のRCE）について

岡山大学 吉岡 朱里

スタディツアー2日目の朝はRCE インジェの事務所に集まり、各々の団体の活動について紹介しあった。ここではRCE 北九州とRCE 岡山の発表についてまとめる。

RCE 北九州からは、北九州市立大学法学部政策科学科、三宅教授のゼミの学生である上野さん、野村さん、青木さんが代表して北九州の市民活動の歴史とESDに関する自らの活動について紹介した。

北九州は高度経済成長期に工場排水が深刻な問題となった過去がある。八幡製鉄所で著名な北九州工業地帯の近隣にある洞海湾は生き物が生息できない「死の海」と呼ばれたそうだ。その後、地元の母親たちが立ち上がり、独自の調査を行って改善要求を出したことで、現在の洞海湾の水質は大幅に改善した。RCE 北九州は工場排水の汚染の歴史から、主に環境問題に力を入れているようだ。

洞海湾の汚染問題で市民の熱心な活動が功を奏したように、北九州には現在でも市民が主体となって改善していくという素地があるという。北九州市立大学の学生も、フードロスを減らすプロジェクトや藍島プロジェクト、韓国プロジェクトなど様々な方面で活躍しているようだ。「市民が変えていくという伝統を引き継いでいる」という言葉が印象に残った。



(RCE 北九州の発表の様子)

RCE 岡山については、岡山大学農学部の脇坂さんと文学部の私が代表して、RCE 岡山の特
徴といくつかの活動について、さらに脇坂さんが母校の高校で行ったアンケートの結果を
紹介した。

RCE 岡山は岡山市域を拠点とし、2005 年 6 月に世界で初めて RCE に認定された 7 つの拠
点のうちの 1 つである。自治体全体で ESD を推進する「ホール・シティ・アプローチ」を実
施しており、行政だけでなく公民館や学校、大学、市民団体などあらゆる組織で協力して活
動を進めている。

また、脇坂さんが母校の高校生を対象に実施したアンケートでは、高校生がニュースメデ
ィアから韓国に関する情報を得ている傾向が強いこと、6 割程度が現在の日韓関係は良好で
はないとしたものの、全体の 8 割以上が現在の今後の日韓関係の改善に期待していること
を明らかにした。また、韓国人と交流した経験がある生徒が少なかったことから、日韓の交
流促進の大切さを強調した。



(RCE 岡山の発表の様子)

発表は通訳の宋さんや福原さんを交えて終始和やかな雰囲気で行われた。

今回のように他大学の学生の ESD 活動について知る機会はこれまで無かったため、貴重
な機会だった。他の学生が熱心に活動する様子を知ると、自分も頑張ろうという気持ちにな
る。今後は ESD 活動積極的に関わっていくことはもちろんだが、ユースの交流にも参加して
いきたいと強く感じた。

北朝鮮との軍事境界線

北九州市立大学 上野 由太郎

1. 乙支展望台

乙支展望台は軍事境界線から 1km 南にある山の上にあります。バスで向かいましたが、途中で軍人から車の検査と全員分のパスポート提示を求められます。このような厳重な検査を見ると北朝鮮と韓国はまだ休戦中であることの実感が湧きます。展望台は山の上であり、向かう途中の風景もとても綺麗でした。展望台に到着すると、そこからは完全に写真撮影禁止でした。中に入るとそこはホールようになっており、屋内から北朝鮮を見るというシステムでした。ガラスの向こうは高い山が多く見え、どこからが北朝鮮なのかわからなかったのですが軍人の方に教えていただきました。その方によると北朝鮮までの距離は近いところだと 1km ほどで、高い山は全て北朝鮮であるということがわかりました。

展望台には望遠鏡が設置されており、500 ウォンで使用可能でした。望遠鏡を覗いて北朝鮮を見ると、滝や北朝鮮の国旗、焚き火をしているのか煙が上がっている場所などを見ることができました。滞在時間 30 分ほどで帰りましたが、帰る際に少し驚いたのが全員十分な消毒を受けないといけないということです。北朝鮮から豚の病原菌を持ち帰らないようにするためだそうです。



(乙支展望台)

2. 第4トンネル

乙支展望台を見学した後、すぐ近くにある第4トンネルに向かいました。第4トンネルは南侵略用のトンネルとしては最も新しく発見されたトンネルで、1990年に非武装地帯(DMZ)の内部から発見されました。ベトナム戦争のクチトンネルのようにとっても狭いトンネルのイメージがありましたが、思っていたよりも広く、人が5人ほど横に並んで歩くことができる広さでした。このトンネルも乙支展望台と同じく写真撮影禁止でした。トンネルの入口から徒歩で500mほど進むとトロッキがあり、トロッキに乗って30秒ほど移動し、北朝鮮が掘ったままの状態のトンネルを見ることができました。トンネルのトロッキに乗って移動した場所は幅がとても狭く、朝鮮戦争時はこれほどの広さしかなかったということも知りました。

トンネルを見学したあと側にあった資料館を見学しました。資料館には軍が使用していた銃器や地雷、資料館の外には戦車もありました。資料館の中では朝鮮戦争の映像も流れて

おり、朝鮮戦争の激しさを知ることができました。太平洋戦争時の日本は映像ではなく写真で見た記憶しかなかったため、映像で朝鮮戦争を見たときは、戦争は起こしてはいけないと改めて感じました。



(第4トンネル入り口)

言語を越えた交流～紅葉とピレ薬水～

岡山大学 吉岡 朱里

3 日目の昼食後はユネスコソラク山公園の紅葉を見学し、ピレ薬水のある場所を訪れた。朝には別の場所へ行く予定も出ていたが、道路の渋滞とチケットの売り切れで結局もとの計画であった、ペクタムサに行ってからユネスコソラク山公園に行くことになった。車が往来するなか、ゆるやかな坂道を歩きながら見る赤と黄色の紅葉に包まれた景色は素晴らしく、カメラのシャッターを切る手が止められなかった。特に、帰り道に坂を下りる際の景色は、まるで絵画のように美しい。太陽の光が赤・黄・緑の葉から透いていて、幻想的な風景である。

ピレ薬水はバスを降りて、坂を上った場所にあった。色彩豊かな木々が井戸を囲んでいる。井戸に向かって人々が列をなしていた。韓国の方が薬水を飲んでいるようだ。私も試しに薬水を飲んでみた。鉄をじかに舐めたのかというくらい、鉄の味がした。味の通り、ピレ薬水には大量の鉄分が含まれているようだ。現地の方は水筒を持参していて、井戸から水を持って帰っていた。

また、紅葉の楽しみ方は人それぞれだった。ゆっくりと眺めて歩く人もいれば、カメラで一心不乱に写真を撮っている人もいる。屋外コンサートが始まり、美しい歌声が響く中をゆっくりと下っていく。昼食でお腹が満たされていたうえ、耳も目も満足した。

紅葉を楽しむことは日本独自の文化であると思い込んでいたので、韓国でも紅葉が大切な景色とされていることを意外に思った。同じ空間で紅葉を眺めるという活動は、言語の壁を越えた交流である。同じような美的価値観を共有しているという事実は興味深く、またそこに文化交流の意義が見いだせるかもしれない。



(ソラク山公園の紅葉・下り道)



(ピレ薬水の井戸)

百潭寺（ペクタムサ）

岡山大学 脇坂 涼奈

新羅第 28 代真徳女王(在位 647-654)の時代に慈蔵が建てたという百潭寺は、百潭溪谷の上方部に位置している。寺の名称が何度か変わったり、寺自体が十数回消失したりと、歴史的な曲折が多い寺である。現在の名称は 18 世紀に付けられたもので、「大青峰から寺までに水溜り（潭）が百個ある」ことから来ているらしい。また、百潭寺は韓国の観音信仰の聖地として知られており、その溪谷の一角にある石の塔は、寺を訪れた人々が願い事を込めて積んでいったものだという。実際に見に行くと、辺り一帯、見渡す限りに石の塔が積み重なっている。これまでに見たことのない、どこか神秘的な風景に驚いた。石塔は大雨が降って川が増水すると崩れて流されてしまう。だが、人々はまた石を積み、気付けば再び元のような光景が作られているという。消失を繰り返したお寺がその度に再建されてきたことと、石塔が何度崩れても再び積み上げられていくことを知り、人々はこのお寺に対して、何か特別な想いを抱いているのだろうと思った。



(※写真左：「百潭寺」と書かれてある。建物を飾る色鮮やかな模様が綺麗だった。)

お寺までは、シャトルバスを利用すれば 20 分程度で行くことができるが、美しい百潭溪谷の林道を 2 時間かけて歩いてくる人たちもいるようだ。林道沿いの森や川はバスの中からも素晴らしく綺麗だったので、その景色を見ていれば 2 時間もすぐなのかもしれないと感じた。百潭寺は、山上に在っても多くの人々を寄せ集める、すごい場所だと思う。様々なテンプルステイのプログラムもあり、観光客に人気があるようだ。

ちなみに、韓国に観光好きな人は多いようだ。秋の紅葉がちょうど見頃を迎えていたこともあり、お寺までのシャトルバス乗り場には観光客がずらっと並んで、終わりが見えないほどの長蛇の列ができていた。私たちは早くから出掛けることで、何とか長時間並ばずに行くことが出来た。このような人気の場所に来られて良かったと改めて思う。

ネッカマウル（山村）体験

韓国海洋大学校 ^{パク} ^{チャンウ} 朴 贊佑

ネッカマウルは美しい自然環境を基盤にして計画が立てられ、設計された村である。産業は農産物の販売と観光を主にしており、村の繁栄を目指している。

注目すべきところは、新しいまちづくりに関して環境問題について深く考えているということである。また、保全された美しい自然環境を長所にし、それを商品化させ経済に繋げている。まさに未来的な村であり、空想的ではなく現実的な正しき「まちづくり」の行く道であると判断したのである。しかし、同時に、実現は難しいのではないかという疑問を持った。観光を主にした経済構造を作るためには、村に関する情報をインターネットやSNSで簡単に探せるほうが良い。しかし、筆者の事前調査では、ネッカマウルに関する情報を得ることは非常に困難であり、満足できるほどの情報を得られなかった。今回のように、村の名を知っていても情報を得ることが困難であったことから、村の名前すら知られていない今の状況では、情報を拡散し観光客を呼び込むのは難しいのではないだろうか。

次に、村の特徴は、美しく管理されている自然環境である。しかし、観光客の増加にとともに、必然的に環境汚染を呼び起こすと思われる。例を挙げれば、ゴミや煙草の吸い殻のポイ捨てなどの問題である。これは、村が求める価値とは違う結果を呼び寄せかねないと筆者は判断した。

これらの疑問についての村長の答えは以下のとおりであった。村の情報量の不足に関しては、村が完成したのは比較的最近であり、SNS等での情報提供の作業時間が持たておらず、今後の課題でもあるということだった。また、観光客の増大に向けての管理に関しては、入村制限（現状の計画では年間2万人まで）をかけることと、一般の観光客を対象にするのではなく、特定の目的を持つ人を対象にすることが解決策であると答えた。例えば、子どもを対象にした環境教育や、村の自然を利用した保養・治癒等がそれにあたる。

今回の訪問はSDGsや新しいまちづくりについてとても勉強になった。21世紀になり、環境問題はまさに世界的な注目を浴びている。ネッカマウルが韓国の未来への道のロールモデルになることを筆者は本気で願っている。



韓国伝統料理体験

後藤 加奈子

日時：10月27日14時～17時

会場：ネッカンマウル調理実習室

伝統料理：じゃがいもチジミ、餡入焼餅

調理法：①じゃがいもチジミ・・・じゃがいもをすりおろし、ニンジン等千切りした野菜をまぜ、油でかりっと焼く。コチュジャンのたれをつけていただく。

②餡入り焼餅・・・キビ粉を耳たぶほどの固さに練り、薄く延ばして直径10cmの丸にし、油で焼く。焼け目がついたら火からおろし、餡を挟んで半月型にする。

感想：男子厨房に入る！4班に分かれて調理。コンロの前でフライパンをふったのは誰？？写真で様子を伝えます。味はもちろん、美味しいに決まっています。



(男子厨房に入る！ぎこちない手つき??)

韓国伝統文化体験

北九州市立大学 森 美佳子

3日目の夜には、高句麗太鼓を伝える活動を行う方々と一緒に韓国の伝統文化を直接体験した。最初に演奏を披露してもらったが、伝統的な衣装を身に着け、息を合わせて力強く大太鼓を叩く皆さんの姿はとてまかつこよかった。使用した太鼓は日本でよく見かけるような太鼓とは少し違うもので、太鼓のほかにも鐘のような楽器などもあり、とても迫力のあるものだった。太鼓を叩く際に、バチの握り方、握る位置、太鼓の叩き方などのコツを細かく教えてもらったが、叩き方ひとつで音量や迫力が増し、面白かった。演奏する際には、ただ楽器を演奏するだけではなく掛け声や手拍子をすることもあり、演奏する側だけでなく聞く側も参加できて一緒に楽しむことができた。

太鼓を使って実際に演奏したあとに、韓国の伝統的な民謡であるアリランを歌った。大学の韓国語の授業で聞いたことのある歌だったが、地域によって様々なバージョンがあるようだ。

最後は、演奏に合わせて全員で自由に踊ることになった。拍子感や踊り方などはよく分からないまま輪になって踊ったが、全員が笑顔で楽しんでおり、短時間で絆が更に深まったような気がした。

なかなか知る機会のない韓国の伝統的な音楽を実際に歌ったり踊ったりすることができて、とてもいい経験をすることができたと思う。



(韓国伝統太鼓)

三宅 博之

10月28日の午前中にインジェ郡にある新南高等学校を訪問した。貴重な授業時間中に受け入れを許可していただいた校長先生をはじめとする高校の関係者には感謝したい。新南高校は、全校生徒数が100人にも満たない小さな学校である。しかし、校舎は、韓国の高校らしく、建物ががっしりしている。伝統がある高校という印象を持たせてくれた。まず、校長先生から、この地域の特徴（北朝鮮に近いことから軍の部隊が多い）と学校の概要の説明があった。規模は小さいものの、インジェ郡の中等教育の要になっていることが強調された。同時に、生徒のお母さん方がいて、朝早くからテーブルに色鮮やかに並べられた韓国伝統菓子を作ってくださっていたという説明もあった。そのあとに、保護者であるお母さん方の紹介がなされた。中には北九州市に出かけた生徒の母親がいるとのことで、日本でのもてなしに対して、感謝を込めて日本人である私たちに韓国伝統菓子を準備してくださっていた。

RCE インジェの活動を見守っておられる高先生によってパワーポイントを用いての説明が続いた。そこでは、新南高校はユネスコ学校になって4年目であり、特に、世界市民教育に力を入れている。高校生の学習している姿と一緒に学習している本が紹介された。つまり、世界市民教育などの本である。さらに、生徒が中心になって行



（韓国伝統菓子）

った活動、在来種の保存にかかわる実践活動、多文化家族（韓国では両親の一人が外国籍の場合の世帯はこのように呼ばれる）の母親や子どもを学校に招待して行う内なる国際化の学習（国際理解教育）、学校の前の川の清掃と水質調査を通してなされる環境教育、済州島の歴史文化を学び取るために行われた現地での地域の高齢者からの聞き取り、近くの軍人部隊に入り、軍人と花壇を作る、軍人と食事をとるといった取り組みもうかがった。ちなみに、北九大の隣にも、陸上自衛隊があるものの、授業の一環として自衛隊員と一緒に食事をするのは難しいと思われる。特定の地位にある自衛隊員が授業科目で特別講師として科目担当教員に招待され、授業に協力をしていることはあるものの。高先生は、国際理解教育として、多文化家族の中国人女性を通して、中国文化の理解教育に焦点をあて、具体的には、彼女たちから中国の飲食文化を習い、地域の祭で調理を行い、生徒たちに中華料理を販売させている。販売技術や表現能力を鍛えるために、学校は120万円をもらい、演劇の練習、発

表のために使用し、結果として生徒たちの能力はより磨かれ、変わったそうである。地域の人々との交流、気候変動や EM（有用微生物）菌利用などに関する現場訪問実践学習、活動メンバーの中に、多文化家族の出身者や両親がいない生徒を入れるといった工夫を通じて、より授業を楽しく、意味深いものにする試みがなされている。高先生自身も、北朝鮮と韓国との統一を望んでおり、統一が何をもたらすかを考え、生徒に説明できるように、ドイツに足を運び、調査をしてきている。このような高校での ESD に関わる取り組みが説明された。

その後、出されたお菓子や果物がほとんど手付かずの状態だったので、時間をかけてほおぼり、同時に、日本から持参したプレゼントを先生や保護者達に手渡した。

私たちは、日本に行ってきた生徒たちが待っている教室に移動した。生徒たちが北九州を訪問しに来た時に、私は私のゼミの数人の学生と一緒に自由ヶ丘高校に出かけ、日本の高校生と韓国の高校生の間でお互いをよく知ろうといったワークショップを行った。言葉は通じないが、自由ヶ丘高校の生徒はタブレットを持っていたため、日本語・韓国語の翻訳機を使って、伝えたいことを翻訳し、見せていた。高校生同士、すぐに仲良しになっていた。その高校生たちが目の前にいた。顔や名前を覚えるのが苦手な私は、このような生徒だったなとかすかに思い出し、懐かしさを感じたものである。

時間制約のため、同教室では、日本の大学生の学習と生活と題して、野村君が三宅ゼミを事例に出し、パワーポイントで説明した。インジェ郡には大学がないので、大学といっても理解が届かない部分がある。よって、日本の大学を紹介することで、大学に少しでも親近感を持ってもらいたいと考えた。高校生の代表が、新南高校の生徒の一日を簡単に説明した。勉強に時間を費やすことが多いらしく、地方といえども、韓国の高校生の大変さが理解できた。

最後に、私たち一行、新南高校の教員や生徒が校庭に出て、集合写真を撮った。非常に思いで深い半日となった。



(新南高校での記念撮影)

一番近い外国・・・ 韓国食レポート！

10月25日(金) 夕食

青木 菜緒

この日の夕食はインジェ郡にあるデゴメンオックというお店で「エゴマ手打ちうどん」を食べた。エゴマとは、一年草のシソ科植物で、青じそとよく似た葉を持つ植物である。ゴマとは全く異なり、韓国ではこの葉を食す文化があり、エゴマの葉のキムチ漬けも有名である。また、エゴマの種子は油脂の原料となり、菜種が利用される以前から伝統食として使用されていた。最近では美肌やダイエット、癌、高血圧など多くの疾患の予防への効能が知られて注目を浴びている。



私たちが食べたうどんのつゆにエゴマが使われていた。エゴマという名前なので、ゴマに似た風味がするのかと想像していたが、ゴマとは違い、言葉では表現し難い豊かな風味がした。豆乳の味も強く、日本より10度以上気温が低く、冷え込んでいた私たちの体を芯から温めてくれた。また、付け合せのユッケジャンやキムチなどもピリ辛で韓国に来たということを実感させられた。

10月26日(土) 朝食

青木 菜緒

韓国 DMZ 平和と生命の丘での朝食は、日本の食堂と同じようにおかずとご飯、スープを自分の分だけ盛り付けていくものであった。ここでも韓国らしさを強く感じた。ワンプレートに注いでいき、箸とスプーン、スープのお椀は金属製であった。また、大量のキムチにも驚かせられた。日本人は朝から重たいものを食べないイメージがあるが、韓国では朝からおいの強いキムチを食していた。豆腐にかける豆板醤のようなものにもニンニクが効いており、韓国らしさを感じられた。他のおかずもじゃこやソーセージというご飯によく合う付け合せといった面が強く、韓国も米文化であると日本との共通点を見つけることができた。全体的に感じたのは、どの料理にもニンニクが多く使われており、寒さに対抗するための知恵なのだった。

日韓 RCE 事例発表の後にいただいた昼食について報告する。会場は江原道(カンウォンド)麟蹄郡(インジェグン) 麟蹄邑(インジェウプ) 上東里(サンドンリ)にある「한국관」(韓国館)という韓国料理のお店だった。外観は、木製の柵に囲まれ、赤い屋根が特徴的な韓屋造りのレストラン、という感じだった。掲げられていた看板には「인제군」(麟蹄郡)、「특산물」(特産物)、「전문점」(専門店)の文字。ここではインジェで生産された食材が使われているようだ。私たちがいただいた山菜定食には、15~20種類もの山菜のおかずがついていたと思う。トドグイ(ツルニンジンを焼いた料理)など、日本人の私からすると珍しい料理ばかりであった。それらは健康的で、味も美味しかった。焼きサバは肉厚で大きく、脂がのっていて最高だった。味噌(テンジャン)チゲは辛く、舌がびりびりした感覚を覚えている。なお、今回の昼食はインジェ郡主さんのご厚意によっていただいた。私の隣の席に座られたのだが、私は韓国語が話せないために話しかけることが出来ず、とても残念だった。他のツアー参加者の方とお話されているのを聞いていると、郡主さんは郡主になってからはまだ1年6ヶ月程度らしい。郡主として、心の通じ合う人づくりを大切にしていると仰っていた。ご多忙のため短い時間だったが、郡主さんがご同席してくださったこと、そのご厚意に感謝したい。韓国館の美味しいご飯にも感謝。

最後に、食事の際に三宅先生がフードロスのお話をされていたのが印象に残っている。今回のツアーでは、1日3食はしっかり提供される上に、その他の活動中にも、現地の方々のおもてなしによるお食事がふるまわれることもあった。そのため、ずっとお腹が満たされていてどうしても全部を食べきれないこともあった。ESDがテーマのツアーであるし、料理を提供してくださった方への感謝を考えても、食べ残しを発生させたくはなかったので申し訳なかった。ただ、韓国の文化としては、食べきれないほど料理を出すのが良いという部分もあるので、難しいなと思った。食べきれないほど沢山の美味しい韓国料理が食べられたこと、楽しい食事の時間に感謝したい。



(山菜、焼き鯖、味噌チゲ、トドグイ、エビなど)



(中心でお話されているのがインジェ郡主さん)

韓国スタディツアーの最後の夕食は、韓国 DMZ 平和と生命の丘において、鶏肉の鍋料理(タッカンマリ)であった。

タッカンマリとは「鶏一匹」という意味で、まさにその名の通りの鍋料理で、日本の鶏の水炊きに似ており、鶏からたっぷり出る出汁が優しい味わいなのが特徴であった。

鶏肉はホクホクにほぐれていくのでとても柔らかく、鶏一匹といっても2~3人で普通に食べられそうだったが、残念ながら、前の行程の山村体験で作って食したジャガイモチヂミやトウキビ餅がまだお腹に溜まっており、十分に味わうことが出来なかったことが心残りである。しかしながら、メンバーの中にはこの「鶏出汁スープ」に白米を入れて味わっていた者もあり、次回伺った際にはぜひ空腹で味わいたいものである。

この食事で、次の行程の韓国伝統文化体験で高句麗太鼓の演奏を行う市民団体の方々と一緒にテーブルを囲み、話を伺った。私と一緒にテーブルにいた方は、20代の男性の方でインジェ郡にて農業をされているとのことであった。20代男性ということもあり、兵役の話を伺ったところ、農業という専門的な産業の育成・発展に従事し国に貢献しているので軍サービスの対象から外されているとのことであった。インジェ郡の農業が先進的に発展している証であると同時に、兵役という制度が複雑に当たり前に生活に浸透している事を感じるものであった。

この国における兵役制度が若い世代の日常生活に浸透していることが、私たちの国との大きな違いであり、我が国も関係していたという歴史があることに目を背けてはいけないという気持ちである。

日本の鶏の水炊きと同じような料理を美味しく感じることは、日本人も韓国人も感覚が近いという事であり、この感覚を食事だけでなく、平和という観点からも共有していきたいと思った。



(通訳の新南高校日本語教師、福原みさえ先生(左上)と)

朝食はバイキング形式で、自分が食べられる分のおかずをそれぞれのプレートに盛り付けていきます。毎朝バラエティ豊かなおかずが並んでおり、豪華な朝食でかなり満腹になりました。この日はさんまと大根の煮物・手作り豆腐・鯖入りの味噌汁・麦ご飯・五種類の野菜やキムチが用意されていました。



韓国では主食を米飯とし汁物や野菜・魚・漬物とともに頂く形式は日本とあまり変わらない共通の文化ですが、韓国は日本と違い白米よりも雑穀や豆入りのご飯を食べるそうで、とても健康的な食生活です。また、韓国ではキムチをよく食べることは知っていたのですが、やはり韓国を訪れて最初の方は朝食からキムチを食べることに驚きました。しかし、ニンニクや唐辛子が沢山入ったキムチでパワーをつけ、一日を元気に過ごすための源にしていること、それも韓国の文化の一つだと学びました。韓国滞在中はいろんなところでキムチを食べましたが、それぞれの所で味に少しずつ変化があり、酸味が強いキムチや甘いキムチ、辛味の強いキムチなど種類は様々で、私が日本で食べたことのない種類のキムチに沢山出会うことができました。



(施設内の焔でとれた野菜のキムチ)



(癖になるピリ辛味のさんまの煮物)

5、ESD×スタディツアー＝オトナとしての私

○アニョハセヨ！ 韓国インジェのみなさん	三宅 博之	34
○インジェ・スタディツアー2019 を終えて	川島 伸治	35
○韓国スタディツアーに参加して	稲田 佳代子	36
○2019年 インジェスタディツアー	宋 珉鎬	37
○旅の間に考えた。～ESD と RCE と SDGs～	後藤 加奈子	38
○インジェスタディツアーに参加して	高橋 誠一	39
○韓国スタディツアー2019 を終えて	川出 信之	40



(軍事境界線付近)



(朝鮮戦争で使用された軍需品)

三宅 博之

今回は、韓国のインチョン国際空港に集合という例年とは違った形からツアーは始まることになった。国連大学の川出さんは成田国際空港から、岡山大学の吉岡さんと脇坂さん二人は岡山空港から、後藤さんは関西国際空港から、あとの北九州の参加者は、福岡空港からであった。北九州からの参加者も、種々のLCCの航空便を使い、インチョン国際空港に集合した。さすが、韓国の航空会社である。さほどの時間の遅れもなく、全員が集まることができた。今回は、お互いが知らない人が多い。しかし、ESDに親近感を抱いている者同士、すぐに仲良くなれるだろうと考えた。

私にとって今回の旅では、百潭寺（ペクタムサ）に行くことを楽しみにしていた。行楽の秋なので、韓国中から紅葉を見るために江原道に人々が集まってきている。ペクタムサへは直接、自動車で行くことはできず、途中の駐車場で、バスに乗り換える。バス料金はきちんと払わねばならない。観光客からお金をむしり取る一種の新手の商売では？バス会社とグルではないの、と疑いたくなるほどである。

寺に着くと、やはり、観光客が多い。私も観光客の一人だから、他人を責めてもいられない。このような寺は一人で来てじっくり鑑賞したいものである。ちなみに、入って右側に進むと、記念館があり、独立運動家の韓龍雲（1879-1944）が修行を本寺で積んだことを記念して建てられたものである。ここで不屈の闘志を養ったのであろう。寺の前の川には、小石がたくさんあり、いくら高く積み上げられるかが競われている。願いを込めて積み上げるといふ。私は、積みやすい小石を見つけることができず、結局、4つを積み上げただけだった。どんな願いを込めたのか、秘密にしておこう。今では自動車で簡単に来ることができるが、無かったころには、どれぐらいの数の人々が来ていたのであろうか？ソウルからソラク山までは非常に遠く、また、道のりが険しい。そのソラク山の森の中にある寺、人里離れた寺によやくたどり着き、昔の人々は何を願いながら、石を積み上げたのであろう。異国の地でつい思いをはせてしまう。

追記：ツアーを終えて、私は翌日にソウル特別市ドボン区のESD国際フォーラムに参加した。イ・ドンジン区長にもお会いして、様々な話をしていただいた。ドボン区が韓国でのSDGsの先陣を切り、頑張っていること、彼自身が民主化闘争の活動家であったことである。ESDやSDGsへの意気込みもかなり強いのが印象的であった。

インジェ・スタディツアー2019 を終えて

川島 伸治

毎年実施されている北九州 ESD 協議会 調査研究・国際プロジェクトの韓国スタディツアー。これまでトンヨン、ウルチュ、ピョンテク、インジェなど一般の観光ツアーでは決して訪れることのない韓国をのぞき見してきた。“のぞき見”と表現したのは、現地での滞在が2～3日しかなく、とても“知る”や“理解する”には至らない、せいぜい“体験する”程度しかできないからである。しかし、そんなのぞき見であっても長く続けていると、出会う人や町の風景などの印象が違ってくる。特に今回訪れたインジェは、スタディツアー以外にも含めると10回近くになるのではないだろうか。いまでは、「また、ここに帰ってくる事ができた…」などと思わずロゾさむ、どこか懐かしささえ感じるようになっている己に気づく程である。

(定年後は韓国に移り住むかもなあ...)

今回のスタディツアーは、調査研究・国際プロジェクトのメンバーだけでなく、国連大学や北九州市立大学、岡山大学、そして久留米大学からの参加もあり、いつもと違った顔ぶれのお陰で、私の気分も高揚していたように思える。まさに、日韓関係が戦後最悪と言われる中だからこそそのESDであり、RCE 同士のつながりが重要になってくる。このような時期にスタディツアーに協力・参加くださった国連大学に感謝、北九大、岡山大、久留米大の学生の方々にも感謝である。今度は、全国のRCEメンバーとともに再び訪れたいよね。

そうそう、感謝といえばこの人、宋珉鎬の存在を忘れてはならない。彼のおかげで、我々がどれほどの不自由から開放されていることか。感謝、感謝である。

(宋さん、また飲みに行こうね！)



(インジェ郡主の通訳をする宋さん)

韓国スタディツアーに参加して

稲田 佳代子

このたび、初めて韓国スタディツアーに参加し、RCE インジェを訪れた。韓国において RCE は 5 つ認定されており、その中で RCE インジェは韓国で生命と平和を守る活動において高い評価を得てきている。

インジェ郡は、軍事境界線により緊張と平和が共存する韓国最北の地域であり、ここでは南北分断の歴史と今なお続く現実を考えずにはいられなかった。北朝鮮が見渡せる高地に位置する野外展望台からは、分断の現実を肌で感じる事ができた一方で、そこに警備する軍人の方々があまりに若く、あどけない笑顔で接してくれた事で私たちと同じだという安心感を得た。

現在の日韓の外交関係が悪化している状況下においても、私たちが訪れた韓国 DMZ 平和と生命の丘の職員の方々を始め、ネッカンマウルにおいて山村体験で教えていただいた方々、高句麗太鼓の保存活動をされている市民団体の方々及び新南高校の先生、保護者、生徒その他の方々からたいへん温かく歓迎していただいたことが、この旅で最も感銘を受けたことである。これは、北九州 ESD 協議会が 2007 年から行っている韓国スタディツアーや韓国からの視察の受け入れなどを通して、様々な方々との相互交流を行い、ネットワークを築いた結果であると思う。

非武装地帯に隣接し、住民の半数以上が軍に関係するインジェ郡の住民は、SDGs のターゲット 16「平和と公正をすべての人に」を無視して生活することはできないだろう。これが、子どもから大人まで ESD が浸透している理由であると想像する。平和な社会を痛切に望んでいるインジェ郡の住民は、私たちが考えている以上に、日本人や日本社会を信頼し、交流することで、平和な社会つまり持続可能な社会の構築を図っているのではないかと考える。したがって、ESD が発展する限り、外交上の関係悪化は表面的なものでしかなく、市民間では深い関係でつながっていくと思われる。

今回は、国連大学の協力により RCE 岡山からも参加があったことで交流の輪が広がった。

今後も、北九州 ESD 協議会等と RCE インジェの交流が続き、相互交流を通じて、お互いの ESD を理解し、持続可能な社会を作りたいものである。

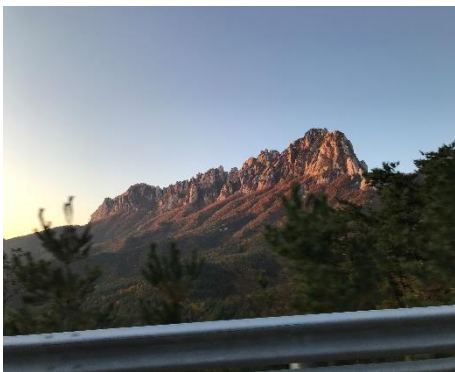
宋 珉鎬

2019年の日韓関係は21世紀に入ってから一番厳しい時期であると言える。冷え切った両国の関係の中、今年は国連大学や日本のRCEのユースを中心に「インジェスタディツアー」を実施した。今年のテーマは「日韓間の平和と生命」と「伝統文化及び若者の交流」であった。日韓間の平和と生命は「基調講演」、「両RCEの活動報告」、「展望台」に焦点を当てて、そして伝統文化及び若者の交流は「住民との食・伝統文化交流」、「歴史紀行・百潭寺」に行くことであった。

今回は特に若者同士の交流に力を注いだ。日本からは北九州市立大学、岡山大学、久留米大学、韓国海洋大学校から学生が参加した。韓国からは徴兵中である軍人、日本への留学経験がある学生、地元の高校生などが参加した。セミナーや自己紹介のワークショップなどを通して、お互い違う文化・環境で育てられた若者であるが、共通点が多いところから現在の日韓関係はきっと改善できるという希望を感じた。

いつも「縁」を大事にすることを何気なく思ってきたが、今回のスタディツアーにおいてなおさらその大切さを感じた。例えば、いつも一人で背負ってきた通訳を、新南高校の福原みさえ先生、韓国海洋大学校の朴君、そしてガイドさんのお蔭で全日程を無事にこなせることができた。また、徴兵中の軍人は以前グローバルアリーナでインターンシップをした学生で、交流会で現在の若者の生の声を聴くことができた。この紙面を借りて皆さんに感謝の意を送りたいと思う。

持続可能な社会の構築は一個人ではなく、多種多様な主体が一緒になって構築することが何より望ましい。少しでもその理想に近づくことや価値のあるスタディツアーにするために、プログラムの内容をもっと工夫する必要性を感じた。



(蔚山岩)



(左からキム・チャンフム、イ・ファン、筆者)

後藤 加奈子

ESD と出会って 10 年を超えた。ESD を通じて知り合った方々とも。今回のスタディツアーはなんと 12 回目だ。RCE インジェへの訪問は 2013 年から始まった。お付き合いはもう 7 年になる。お付き合い、という言葉を使うのは、「交流」より深い、まるで親戚のような関係性を感じているからである。最近では RCE インジェから学生や社会人などの来北もあり、行ったり来たりの「お付き合い」も深まっている。言葉の壁はあるが、ESD に共感し、ESD を広げていこうとする志は同じだからか、あまり不自由さは感じない。毎回お世話になるコーディネーターの宋さんのお力も大きい。これほど長い間、ツアーが継続出来たのもコーディネーターの存在のおかげである。

ESD (Education for Sustainable Development) は 2002 年に日本が提案し国連で採択されたのち、2005 年から「国連 ESD の 10 年」が開始された。国連のキャンペーンは 2014 年に終了し、すでに 5 年が経過している。日本語訳は「持続可能な開発のための教育」だ。出会った当初はその概念に涙が出るほど感動したが、さて、何をどうすれば ESD なのか、まずは研究が必要だった。私が調査研究チームにいる理由もそこにあり、いまだに ESD について謎解きを続けているのである。RCE (Regional Centres of Expertise on ESD) とは、ESD を地域で実現していくための拠点という意味で、国連大学が推進している。北九州は市民力で公害を克服した歴史や活発な市民活動が評価され、2006 年国内で 4 番目に認定された。私は学校や保育園・幼稚園等で ESD のプログラムを開発・実践している。自分の活動に没頭していると、他の活動が見えなくなり「タコつぼ化」してしまう。貧困や人権問題、地球温暖化などの地球規模の課題は不可分の関係にあり、また、世界中の人々が同時に取り組んでいかないと解決しない。視野を広げ、課題のつながりに気づくために、「よそ様」の活動に関心を寄せることが必要なのである。スタディツアー等で海外の RCE と交流し様々な取り組みを知ることは、視野を広げるためにとても重要だと感じている。

17 色のカラフルなアイコンで知られる SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標)。ESD と同様、課題のつながりに気づくことが目標達成の鍵である。そのためには教育による世界的視野の獲得が必要であると考え。2005 年に起こった ESD はその 10 年の蓄積をもって SDGs に「教育」で貢献していこう。私もその一端が担えるよう、これからも大好きな ESD を抱きしめていきたい。

インジェスタディツアーに参加して

高橋 誠一

北九州市役所に入職して、中国・香港・タイ・シンガポール・インドネシア・台湾とアジアの国々には仕事で数多く訪れたことがありましたが、日本と一番近い国、韓国には今回が初めての訪問となりました。福岡空港を飛び立って30分もすると、機内の窓からは韓国本土の景色が飛び込んできました。国土の70%が山と言われているように、眼下には山々が連なっていました。ぼんやり眺めていると仁川国際空港に到着しますというアナウンスがあり、東京よりも短時間で仁川空港に降り立ちました。

今回のスタディツアーは国連大学、RCE 岡山のユース、RCE 北九州のユース等総勢16名の参加がありました。したがって、初めての試みとして旅行会社を介して、韓国国内の移動は快適な大型バスに揺られてのツアーとなりました。

この韓国スタディツアーの特徴は、一般的なツアーでは経験できない様々な体験が盛り込まれていたことです。具体的には、北緯38度の軍事境界線から約1kmに位置する乙支展望台（ウルチジョンマンデ）の訪問です。韓国軍の（バスに乗り込んで来ての）厳重なチェックを受けて出入りが許されました。今でも韓国軍（徴兵制度によって入隊した若者）が24時間体制で北朝鮮内を監視しており、北朝鮮軍の施設や兵士の姿も見ることのできるの説明を受けました（生憎、その日は北朝鮮軍兵士の姿は見る事が出来ませんでした）。しかし、未だ北朝鮮側の土地は撮影禁止となっていました。

また、第4トンネルにも行きました。この第4トンネルは1990年に軍事境界線から1.2km離れた非武装地帯から発見され、高さと幅が1.7m、深さは145m、長さは2,052mで、北朝鮮が南侵略用のトンネルとして武器等を輸送するために掘削していたとの説明を受けました。トンネルの内部にはトロッキに乗って、北朝鮮との国境付近まで行くことが出来ました。このような施設を訪問すると、休戦状態にもかかわらず日本では感じる事が出来ない緊迫感を感じました。その他にも、住民と一緒に伝統料理作って味わう「山村マウル体験」、韓国の太鼓をたたいて「アリラン」を歌って踊った地元の人たちとの楽しい交流会、シンナン高校での交流等……。

このような素晴らしいスタディツアーが実施できた最大の要因は、RCE インジェと北九州ESD協議会との間で、長年に渡って友好関係を築いてくれた人と人との絆があったことだと思います。「韓国 DMZ 平和と生命の丘」の施設を快く提供して下さった職員皆様の厚遇、コーディネーターの宋さんの調整等皆様の協力のおかげです。

RCE インジェの皆様、ありがとうございました。参加された皆様お疲れ様でした。

川出 信之

今回の韓国インジェ郡でのスタディツアーから帰国し数日が経つ今、改めて思い返す事は我々が宿泊所として利用させていただいた施設、「韓国 DMZ 平和と生命の丘」とその名に込められた想いである。私は当初、実は「平和と生命」というその文字の並びに少しだけ威圧感を覚えた。あまりに平和で且つ日々を何の気なしに生きている私のような人間にとって、それらの二つの単語、「平和」と「生命」はあまりにも荘厳な響きがして、言わば重い感があったのである。そしてそれらが併記されている事による相乗効果、静かな山間のまたその奥にひっそりと佇む施設の独特な空間、それらが相まって何やら気持ちが引き締まる思いをせざるを得なかった。これから4日間、この引き締められた気持ちの中で、いったいどのような話を聞き、ものに触れ、景色を見、そして感じるのだろうか。期待と不安、その様な単純な言葉で言い表す事が出来ない複雑な思いが気持ちの中を駆け巡っていたのである。

その様な複雑な心境の中、1日目の夜にいただいたチョンボムジン韓国 DMZ 平和と生命の丘副理事長の懇話は、旅の疲れもあり少し朦朧としていた頭の中を、闇夜を貫く鐘の様に叩き響かせた。副理事長から配られた資料を開くと、いきなり「生命の危機」、「文明の危機」、「平和の危機」、「成長不可能の時代」と言ったショッキングな項目が目飛び込む。そして副理事長がまず読んで欲しいと開いたページ（韓国内の新聞に掲載された副理事長による投稿文）には、韓日国交正常化以降歴代最悪の韓日関係、その要因である日本による輸出制限措置、慰安婦問題、強制徴用賠償判決、云々とあり、日本による植民地支配、日本の現政権への批判、そして日本の右傾化までを危惧する解説がなされている。文章の最後が、日本も韓国も未来志向で新しい平和を作ろうと結ばれていても、それまでの主張がダイレクトでインパクトがあったために、何か取ってつけたような締めくくりの感は否めない。とにかく「平和と生命」を学ぶ事の第一歩は、このように刺激的なものであった。

2日目、昨晚の副理事長による懇話が頭の中を駆け巡る。というよりも、副理事長によるものおじしない、はっきりと考えを主張するその迫力、それがそれまでの韓国の方々に対するイメージと重なり、すでに蹴落とされそうになっている自分に気づく。他の参加者はどの様に感じたのだろうか。午前中に予定されている日韓市民&学生のワークショップでは、しっかりと自分の主張が出来るのだろうか。もしかして、日韓関係に関する日本への批判に晒され、意気消沈してしまうのではないだろうか。・・・だが、その心配は幸いにも杞憂に終わる。

午前中は RCE インジェの事務所がある施設内の会議室で、学生らによるそれぞれの RCE で活動内容や事例の発表が行われた。北九州市立大学の学生による RCE 北九州の紹介、その生い立ちや歴史を踏まえ、現在の市全体による ESD や SDGs に関する取り組みが紹介された。

次に岡山大学からの 2 名は、ホールシティアプローチや公民館の有効活用を特色とした RCE 岡山の活動事例や、「私の考える ESD」をテーマに高校時代に行った日韓関係に関するアンケートを題材にした発表をそれぞれ行った。対する RCE インジェの活動紹介。環境教育の一環として行われる幼稚園へ出張授業では、例えば食について、「種」→「育てる」→「食べる」→「排出する」という連なるテーマについて、絵本というツールを使用し、1 年かけて読み聞かせ子ども達と一緒に考えるという、とても興味深い試みが紹介された。また、インジェ郡の医療の調査という切り口で始めた活動が、地域に住む外国人の子ども達への教育支援に結びついたという話しには、意外性とそのバイタリティに驚かされたりもした。

高校 2 年生のシヨンギョルさんは、「Green Teenager」というサークルの部長であり、大学入試のために猛勉強をする傍ら、仲間たちと環境問題について考え、紙コップの使用を金属コップにする運動や、気候変動キャンペーンを行っていると言う。残念ながら、それぞれの発表の後のワークショップ・意見交換は時間の都合で割愛されたが、これら発表された活動の内容がまさに ESD そのものであった。ESD という言葉をきっかけに地域や自分の周囲を見渡し、影響しあい、環境や自分以外の人のために活動する。それらの活動がいずれ地域や自分の周囲を飛び越え、見知らぬ人へと相乗効果を生み出す。ここにいる若者たちが、これからも様々な活動を継続し、発案し、そしてお互いに刺激されつつさらなる挑戦を目指して行く、その様な ESD の良い循環が生まれて欲しいと念じているうちに瞬く間に時間が過ぎていった。

一行は、その後インジェ郡主と共に昼食をした後、今回のスタディツアーの肝とも言える乙支展望台（非武装地帯の中、軍事境界線の韓国側から北朝鮮が見渡せる展望台）、そして第 4 トンネル（1990 年に発見された、北朝鮮より韓国側へと抜けようと非武装地帯の地下を通るトンネル）へと向かう。バスは長閑な田園地帯を進みつつも、道路わきにある戦車ブロック、展示された戦車や大砲、地雷を注意喚起する看板などが目に入り、気持ちはいやおうなく緊張しはじめる。やがて非武装地帯に入るための民間人へのチェックゲート、山間の木々の間をどこまでも続く有刺鉄線、軍服姿の韓国軍兵士、駐車場で車を誘導するまだあどけなさの残る兵士（憲兵=MP と言わなければならない）は、「バイト」ではなく「任務」をこなしている。展望台に入る。朝鮮戦争の歴史の解説。展示された写真には、銃弾で穴だらけになったヘルメット。展望台から韓国側を眺めると、そこは当時の米軍が名付けた「パン

チボール」と呼ばれる盆地で、現在は畑が広がっているが、韓国戦争当時、銃弾を使い果たした兵士達が素手で闘い肉弾戦を展開した場所だという。そして、人気の無い山々が並ぶ北朝鮮側。有料望遠鏡で覗いた先からは、肉眼では見逃してしまう所に北朝鮮の赤い旗が目に見え飛び込む……。そう、ここは「国境」ではなく、あくまでも「軍事境界線」であり、「分断」された一つの国の中の近くて遠い景色と、悲しい緊張が辺り一帯を覆っている場所なのである。

インジェとその周辺にある日常は、このような空気に覆われた日常なのだとはとす。午後の西日を浴びて紅葉を輝かしている山々も、長閑な田園風景も、お店の前で樽の中の白菜をひっくり返すおばちゃんも、これが日本であれば単に「平和」と表現できる景色が、一転して全く違う意味の「平和」に感じられていく。3日目、近郊の観光地や里山の様な山村マウルを巡り、地元住民とジャガイモチヂミとトウキビ餅を作り、夜は伝統的な太鼓の演奏を堪能したり、演奏者達と笑いを共有していても、最終日の高校訪問で韓国の高校生たちの笑顔を眺めている間も、その感覚は変わらない。「引き締まった平和」と呼ぼうか、「性根の座った平和」と言えば良いのか、日本の平和とは違う、どっしりとした重厚感のある「平和」である。

そしてここにある「生命」も、またこの地にある違った視点からその言葉の意味を吟味する事が出来る。すなわちこの地に宿る「生命」、自然や貴重な生態系は、非武装地帯という不平和の副産物の中で守られ繁栄してきたのであって、突き詰めて言えば、いつかこの地帯に国家統一という平和が訪れ、軍事境界線が取り除かれる日が訪れた時、これらの生命や生態系は、皮肉にも人間による開発という破壊に晒される事になるかもしれない。つまりこれらの貴重な生命たちは、「平和によって破壊され得る生命」とも言えるのではないだろうか。

4日間の滞在が終わり、私の脳裏を埋め尽くした「重厚感のある平和」と「不平和の中の生命」という二つの概念は、そのまま「平和と生命の丘」と名に込められた想いへと繋がっていく。もしこの様な想いを込められているのだとしたら、冒頭のチョンボムジン韓国DMZ平和と生命の丘副理事長による懇話にも、同じ東アジアの、とても近い隣国の私たちへ、平和への尊さ、脆弱で貴重な生命を守る気持ちの大切さを解って欲しい、という想いがこめられた話なのだったと腑に落ちてくる。

「平和と生命」という名前に込められた韓国人の、インジェの方々の想い。それらの想いが、平和麻痺した私の心に温かく重厚な、何とも言えない感覚を今も残している。

●Special・thanks

国連大学サステナビリティ高等研究所

RCE インジェ

ネッカンマウル

韓国 DMZ 平和と生命の丘

日本語通訳協力：福原 みさえ氏（新南高校 日本語教師）

日韓コーディネーター：(株) グローバルアリーナ 宋 珉鎬氏

韓国 DMZ 平和と生命の丘 金 昶欽氏



(インジェ最後の夜、皆で心を一つにしてアリランを踊った。)

【編集後記】

- ・年末年始のお忙しい中、報告書作成のために写真や原稿をお寄せいただきありがとうございました。ご協力に感謝です。編集作業をしながら再度インジェを旅した気分になりました。(後藤)
- ・今回のツアーは国連大学からの支援もあり、多くの RCE ユースに参加して頂くことが出来ました。そこで本報告書は「若者」を中心とした構成にしました。ESD の将来を担うユースの存在の大切さを改めて感じる編集になりました。(川島)

2019 韓国スタディツアー報告書

2020年(令和2年)2月1日 発行

編集 北九州ESD協議会 調査研究・国際プロジェクト
三宅 博之・川島 伸治・後藤 加奈子

発行者 北九州ESD協議会

住所 北九州市小倉北区魚町3丁目3-20 中屋ビル地下1階

電話 (093)531-5011